

ドイツ統一と大学改革

——ベルリン・フンボルト大学社会科学者が経験した困難に関するライフヒストリー分析——

愛知大学 飯島幸子

【1. 目的】

本報告では、ベルリン・フンボルト大学の社会科学者 42 名のライフヒストリーより、ドイツ統一、そして大学改革 (die Universitätssreform) にともない彼らが経験した困難に関する語りに焦点を当てた分析を試みる。ドイツ統一は事実上、旧東独の旧西独への併合であり、東側社会システムの諸相には無批判のうちに西側システムが強力に導入される結末となった。大学もしくは学界の領域も例外でなく、統一により旧東ドイツの学界で生じた、西側システムへの性急な変換を凝集した出来事が大学改革である。その結果、旧東ドイツ (DDR) 出身の社会科学者の多くにとって統一後の大学改革は職業キャリア上の決定的な転換点として作用した。大学改革の後、何らかのキャリア転換を迫られることとなった 35 名の語りから、彼らが経験することになった困難の具体的な事例を提示して分析・考察する。

【2. 方法】

ドイツ統一後の大学改革は R. マイツらによって問題化され、彼らの短期プロジェクトの成果は重要な先行研究として挙げられる。また、F. フィルマーは「DDR の植民地化」の文脈で大学改革の問題も論じている。大学改革をめぐり「同時期に同じ大学に在職した社会科学者」という特定の集団を対象に横断的な調査と聞き取りを行った研究事例として、本研究は位置づけられる。収集したライフヒストリーには、変動期における社会史と個人史、ならびに変動とエイジェンシー (agency) の観点をとりいれ、さらにライフヒストリー・アプローチより 3 つの時期区分 (第一期: 旧東ドイツ (DDR) 時代から「変動期 (die Wende)」まで、第二期: 「大学改革」期のプロセス、第三期: 「大学改革」後から現在まで) をもうけて分析を行った。

【3. 結果】

とりわけ第三期 (「大学改革」後から現在まで) にて調査対象者の大学改革後の経験を分析の俎上に載せられたことは、本研究最大の成果の一つである。第三期の分析では、大学改革後の進路に見るキャリア転換と適応の過程を 5 つに類型化した (円満型、降格型、転職型、転身型、失意型)。この内、円満型と降格型をのぞく 3 類型の事例が、大学改革の後、何らかのキャリア転換による困難を経験せねばならなかったケースに該当する。

【4. 結論】 対象者が経験した困難の具体例には、専門研究領域のもつイデオロギー性、ライフ・ステージにおけるタイミング、DDR 当時の政治性、「東」側であったことの功罪、DDR 学界における出版文化の不在、DDR 時代に獲得した学位の価値減衰などが挙げられる。彼らの困難の事例を詳細に分析することにより、特徴的な中間教職員 (Mittelbau) 層の存在に代表される DDR 時代の大学制度を帰納的に考察することが可能となる。

文献

Mayntz, Renate (Hg.), 1994, *Aufbruch und Reform von oben: ostdeutsche Universitäten im Transformationsprozeß*, Frankfurt/Main: Campus Verlag.

Vilmar, Fritz Hg., 2000, *Zehn Jahre Vereinigungspolitik: kritische Bilanz und humane Alternativen*, Trafo Verlag: Berlin = 2001, 『岐路に立つ統一ドイツ——果てしなき「東」の植民地化』, 木戸 衛一 / 訳, 青木書店。